

水田転換畑を利用した種ショウガ生産技術

農業試験場 主査研究員 田中 郁
主査研究員 橋本 真穂
主査研究員 菱池 政志

【要約】

有機物マルチ資材としてケイントップ（サトウキビの葉や茎を乾燥させたもの）を0.5kg/m²被覆することにより、抑草及び生育促進効果が確認された。施肥量は窒素として30kg/10a程度が適正であり、有機配合では基肥16kg/10a+追肥12kg/10a施用、緩効性肥料では全量基肥施用とすることが効率的であった。ショウガ根茎腐敗病の防除対策として、冬季の土壤消毒と6月中旬から8月中旬頃までの薬剤防除を組み合わせることが有効であった。

【背景・ねらい】

和歌山市で「新ショウガ」生産に用いられる種ショウガは、全量を他県に依存し、近年種ショウガ価格が高騰している。そこで、優良な種ショウガを市内で安定的に確保するため、水田転換畑での種ショウガ生産に重要な、雑草対策、施肥技術及び根茎腐敗病対策について検討した。

【成果の内容・特徴】

1. 雑草を抑制するためには、ケイントップ 0.5kg/m²で出芽後と土寄せ後にそれぞれ被覆すると最も効果的であった。
2. 栽培期間中にケイントップ 0.5kg/m²を2回被覆したところ、保水効果により慣行区より根茎重及び茎数が多くなった。
3. ショウガの窒素吸収量は8月下旬から10月下旬にかけて増加し、11月下旬の収穫時で16.2kg/10aとなった。
4. 種ショウガ栽培における適正施肥量は窒素として30kg/10a程度であり、有機配合では基肥16kg/10a+追肥12kg/10a施用、緩効性肥料では全量基肥施用とすることで施肥効率が高くなった（表1）。
5. ショウガ根茎腐敗病菌汚染ほ場における病原菌の発生生態調査から、6月下旬から7月中旬に発病し始め、その後、8月にかけて二次伝染を繰り返し、発病が増加すると考えられた。
6. 定植前の土壤消毒に加えて5月下旬から8月中旬頃まで2～3週間おきの薬剤防除を行うと、本病の防除に効果的であった。



水田転換畑で生産した種ショウガ

表1 種ショウガ栽培における効率的な施肥例

施肥例	資材施用量(kg/10a)		成分施用量(kg/10a)		
	基肥	追肥	窒素	リン酸	カリ
①	ニューパワー ユーキ038	ケイ酸 加里	28	36.4	62.4
	160	60			
	追肥 120				
②	スーパー エコロング	ケイ酸 加里	28	22	38
	424-180	60			
	基肥 200				

肥料成分：ニューパワーユーキ038(10-13-18)、スーパーエコロング424(14-12-14)、ケイ酸加里:0-0-20